

[B年] 受難節第5主日(2022年4月3日)**【旧約聖書日課】哀歌 3章(1~9節) 18~33節**

- 1 わたしは主の怒りの杖に打たれて苦しみを知った者。
 2 闇の中に追い立てられ、光なく歩く。
 3 そのわたしを、御手がさまざまに責め続ける。
 4 わたしの皮膚を打ち、肉を打ち、骨をことごとく砕く。
 5 陣を敷き、包圍して、わたしを疲労と欠乏に陥れ
 6 大昔の死者らと共に、わたしを闇の奥に住ませる。
 7 柵を巡らして逃げ道をふさぎ、
 重い鎖でわたしを縛りつける。
 8 助けを求めて叫びをあげても、
 わたしの訴えはだれにも届かない。
 9 切り石を積んで行く手をふさぎ、
 道を曲げてわたしを迷わす。
- 18 わたしは言う、「わたしの生きる力は絶えた、
 ただ主を待ち望もう」と。
 19 苦汁と欠乏の中で、貧しくさすらったときのことを
 20 決して忘れず、覚えているからこそ、
 わたしの魂は沈み込んでいても
 21 再び心を励まし、なお待ち望む。
 22 主の慈しみは決して絶えない。
 主の憐れみは決して尽きない。
 23 それは朝ごとに新たになる。
 「あなたの真実はそれほど深い。
 24 主こそわたしの受ける分」とわたしの魂は言い、
 わたしは主を待ち望む。
 25 主に望みをおき尋ね求める魂に、
 主は幸いをお与えになる。
 26 主の救いを黙して待てば、幸いを得る。
 27 若いときに軛を負った人は、幸いを得る。
 28 軛を負わされたなら、黙して、独り座っているがよい。
 29 塵に口をつけよ、望みが見いだせるかもしれない。
 30 打つ者に頬を向けよ、十分に懲らしめを味わえ。
 31 主は、決して、あなたをいつまでも
 捨て置かれはしない。
 32 主の慈しみは深く、懲らしめても、
 また憐れんでくださる。
 33 人の子らを苦しめ悩ますことがあっても、
 それが御心なのではない。

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙 5章1~11節

1 このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、²このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。³そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、⁴忍耐は練達を、練達は希望を生むという⁵ことを。⁵希望はわたしたちを欺くことがありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたし

たちの心に注がれているからです。⁶実にキリストは、わたしたちがまだ弱かったころ、定められた時に、不信心な者のために死んでくださった。⁷正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のために命を惜しまない者ならいるかもしれませんが。⁸しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。⁹それで今や、わたしたちはキリストの血によって義とされたのですから、キリストによって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。¹⁰敵であったときでさえ、御子の死によって神と和解させていただいたのであれば、和解させていただいた今は、御子の命によって救われるのはなおさらです。¹¹それだけでなく、わたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちは神を誇りとしています。今やこのキリストを通して和解させていただいたからです。

【福音書日課】マルコによる福音書 10章32~45節

³²一行がエルサレムへ上って行く途中、イエスは先頭に立って進んで行かれた。それを見て、弟子たちは驚き、従う者たちは恐れた。イエスは再び十二人を呼び寄せて、自分の身に起ころうとしていることを話し始められた。³³「今、わたしたちはエルサレムへ上って行く。人の子は祭司長たちや律法学者たちに引き渡される。彼らは死刑を宣告して異邦人に引き渡す。³⁴異邦人は人の子を侮辱し、唾をかけ、鞭打ったうえで殺す。そして、人の子は三日の後に復活する。」
³⁵ゼベダイの子ヤコブとヨハネが進み出て、イエスに言った。「先生、お願いすることをかなえていただきたいのですが。」³⁶イエスが、「何をしてほしいのか」と言われると、³⁷二人は言った。「栄光をお受けになるとき、わたしどもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください。」³⁸イエスは言われた。「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっているか。このわたしが飲む杯を飲み、このわたしが受ける洗礼を受けることができるか。」³⁹彼らが、「できます」と言うと、イエスは言われた。「確かに、あなたがたはわたしが飲む杯を飲み、わたしが受ける洗礼を受けることになる。⁴⁰しかし、わたしの右や左にだれが座るかは、わたしの決めることではない。それは、定められた人々に許されるのだ。」⁴¹ほかの十人の者はこれ聞いて、ヤコブとヨハネのことで腹を立て始めた。⁴²そこで、イエスは一同を呼び寄せて言われた。「あなたがたも知っているように、異邦人の間では、支配者と見なされている人々が民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。⁴³しかし、あなたがたの間では、そうではない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、⁴⁴いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。⁴⁵人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

哀歌 3章(1~9節) 18~33節

- 1 私は主の怒りの杖で苦しみを受けた者。
 2 主は私を駆り立て
 光ではなく闇の中を歩かせた。
 3 そして、一日中幾度となく
 御手で私を責められた。
- 4 私の肉と皮膚を衰えさせ
 骨を砕かれた。
 5 私を取り囲み
 苦難と辛苦で包んだ。
 6 はるか昔の死者のように
 私を暗闇に住まわせた。
- 7 私が逃げられないように
 主は周囲に石垣を築き
 青銅の枷を重くされた。
 8 たとえ私が助けを求めて叫んでも
 主は私の祈りを聞き入れない。
 9 私の行く手に切り石で壁を築き
 通り道を曲げられた。
- 18 私は言った
 「私の栄光は消えうせた
 主から受けた希望もまた。」
- 19 私の苦難と放蕩を
 苦よもぎと毒草を思い起こしてください。
 20 思い出す度に私の魂は沈む。
 21 しかし、そのことを心に思い返そう。
 それゆえ、私は待ち望む。
- 22 主の慈しみは絶えることがない。
 その憐れみは尽きることがない。
 23 それは朝ごとに新しい。
 あなたの真実は尽きることがない。
 24 「主こそ私の受ける分」と私の魂は言い
 それゆえ、私は主を待ち望む。
 25 主は、ご自分に望みを置く者に
 ご自分を探し求める魂に恵み深い。
 26 主の救いを黙して待ち望ぶ者に恵み深く
 27 若い時に軛を負う者に恵み深い。
- 28 主に軛を負わされたなら
 黙って独り座るがよい。
 29 塵に口をつけよ。
 そうすれば希望があるかもしれない。
 30 自分を打つ者に頬を差し出し
 そしりを十分に受けよ。
 31 主は、とこしえに拒まれることはない。
 32 たとえ苦しみを与えても
 豊かな慈しみによって憐れんでくださる。
 33 人の子らを辱め、苦しめるのは
 御心ではないのだから。

ローマの信徒への手紙 5章1~11節

1このように、私たちは信仰によって義とされたのだから、私たちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ています。2このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望

を誇りにしています。3そればかりでなく、苦難をも誇りとしています。苦難が忍耐を生み、4忍耐が品格(直訳→保証、別訳→練達)を、品格が希望を生むことを知っているからです。5この希望が失望に終わることはありません。私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。6キリストは、私たちがまだ弱かった頃、定められた時に、不敬虔な者のために死んでくださいました。7正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のためなら、死ぬ者もいるかもしれません。8しかし、私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対する愛を示されました。9それで今や、私たちはキリストの血によって義とされたのですから、キリストによって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。10敵であったときでさえ、御子の死によって神と和解させていただいたのであれば、和解させていただいた今は、御子の命によって救われるのはなおさらです。11それだけでなく、私たちの主イエス・キリストによって、私たちは神を誇りとしています。このキリストを通して、今や和解させていただいたからです。

マルコによる福音書 10章32~45節

32さて、一行はエルサレムへ上る途上にあった。イエスが先頭に立って行かれるので、弟子たちは驚き、従う者たちは恐れた。イエスは再び十二人を呼び寄せて、自分の身に起ころうとしていることを話し始められた。33「今、私たちはエルサレムへ上って行く。人の子は、祭司長たちや律法学者たちに引き渡される。彼らは死刑を宣告して、異邦人に引き渡す。34異邦人は人の子を嘲り、唾をかけ、鞭打ち、殺す。そして、人の子は三日後に復活する。」

35ゼベダイの子ヤコブとヨハネが進み出て、イエスに言った。「先生、お願いすることをかなえていただきたいのですが。」36イエスが、「何をしてほしいのか」と言われると、37二人は言った。「栄光をお受けになるとき、私どもの一人を先生の右に、一人を左に座らせてください。」38イエスは言われた。「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっていない。この私が飲む杯を飲み、この私が受ける洗礼を受けることができるか。」39彼らが、「できます」と言うと、イエスは言われた。「確かに、あなたがたは、私が飲む杯を飲み、私が受ける洗礼を受けることになる。40しかし、私の右や左に座することは、私の決めることではない。定められた人々に許されるのだ。」41ほかの十人の者はこれを聞いて、ヤコブとヨハネのことで腹を立て始めた。42そこで、イエスは一同を呼び寄せて言われた。「あなたがたも知っているように、諸民族の支配者と見なされている人々がその上に君臨し、また、偉い人々が権力を振るっている。43しかし、あなたがたの間では、そうではない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、44あなたがたの中で、頭になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。45人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・4月3日「受難節第5主日」の日課主題は「十字架の勝利」。「受難節」は「第6主日」まで続くが、「第6主日」は「受難週」初日として「棕櫚の出来事」から始まる「受難物語」の記念に入るため、「受難」に関連する諸主題が取り上げられるのは「第5主日」が最後になる。日本基督教団の主日聖書日課は、エルサレム入城直前の場面として置かれている逸話物語の中から、十字架(と復活)の出来事を明示的に意味づける箇所が福音書日課に選ばれている。

・福音書日課は、「マルコによる福音書」から、三度目の受難予告を受けて二人の弟子が主イエスに従う者の座を願う箇所。旧約聖書日課は、「哀歌」から、嘆きと共に信仰に基づいた希望の語られる「第三の詩」の一部。使徒書日課は、「ローマの信徒への手紙」から、キリストのゆえに苦難が希望に至ることを教える箇所。

旧約日課(哀歌3章より)

・「哀歌」は、キリスト教会が用いてきた「旧約聖書」(「七十人訳ギリシア語旧約聖書」に準拠)では「エレミヤ書」に続く位置に置かれ「エレミヤの哀歌」として扱われてきたが、ユダヤ教正典では第三区分「諸書(ケトウブーム)」中に置かれ、その中でも「ルツ記」「雅歌」「コヘレトの言葉」「エステル記」と共に「ハメシュ・メギロート(五つの巻物)」の呼称でまとめられる五書の一つとして扱われている。「ハメシュ・メギロート」各書は、タルムードの伝統に立つユダヤ教では祭日の朗読にそれぞれ充てられるようになり、「哀歌」は「ティシュアベ・アブ」と呼ばれる祭日(記念日)に朗読される。「ティシュアベ・アブ」は、「アブ月の9日」の意で、一般には「神殿崩壊記念日」と解され断食が励行されている。ラビ・ユダヤ教の聖書解釈の基礎となる「ミシュナ」によれば、この「アブ月の9日」には、イスラエルの歴史上5つの悲嘆すべき出来事が起こったとされている。すなわち、①シナイ山から約束の地を目指したモーセ率いるイスラエルの民が、12人の斥候の偵察報告を聞き、約束の地への侵入を断念した(民数記13~14章)。②エルサレムの町と神殿がネブカドネツアル王率いるバビロニア軍によって陥落し破壊された(前587年ごろ。王下25章)。③ユダヤ戦争の結果、エルサレムがティトゥス帝率いるローマ軍によって陥落、破壊された(後70年ごろ)。④ハドリアヌス帝によってエルサレム神殿跡地が更地にされ、ユピテル神殿建設計画が始まった(後132年ごろ)。⑤これに反対するユダヤ人らが反乱を起こすが(バル・コクバの乱)、ハドリアヌス帝率いるローマ軍によって完全に鎮圧・殲滅させられた(後135年ごろ)。以上の歴史的出来事が、いずれも同月同日に起こったとは言い難いが、ラビ・ユダヤ教では、これらを一つの神学的主題のもとに受けとめ、この悲劇的結末はイスラエルの民自身の分裂や内紛に起因すると教えてきた。

・「哀歌」は、五つの「アルファベット詩」またはそれに相当する形式の詩歌によって構成されており、前587年ごろのエルサレム陥落前後以降を背景としていると推認されるが、いずれの詩も著者などの詳細は不明である。古代オリエント世界では、都の陥落や王国の滅亡を嘆き歌う「哀歌」が広く残されており、同様のものとして、バビロン捕囚またはエジプト亡命組のユダヤ人らによって著されたものと考えられる。五つの詩の中で、「第三の詩」のみ、嘆きに終わらずに信仰に基づく希望が語られている。すなわち、日課箇所において、1~20節ではもっぱら「嘆き」が歌われるが、21~24節では「信仰」が喚起され、25節以下では信仰に基づいた「救いの希望」が告げられている。

使徒書日課(ローマ5章より)

・「ローマの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の第一に置かれた書簡文書。使徒パウロが未訪のローマ教会に宛てて自己紹介とエスパーニア宣教計画への協力を求めて記した。パウロのローマ訪問は、「使徒言行録」が伝えているが(28章)、彼がそこからエスパーニア宣教に赴いたかどうかは定かでない。教会の伝承では、ネロ皇帝の迫害に際してペトロと共に殉教したともされるが、別の伝承では、その迫害を逃れてエスパーニア宣教に赴いたとも言われている。いずれにしても、ローマ教会において、使徒ペトロが指導性を発揮したことは確かであるが、パウロにも指導性を発揮する機会があったという確たるものはない。パウロの教会に対する指導性は、もっぱらエーゲ海周辺(アカイア州、マケドニア州、アジア州)の教会に集中していた。一方、当時のローマ市には大きなユダヤ人社会が形成されており、これを背景にユダヤ人およびユダヤ教に改宗したり求道中の異邦人たちの中からキリスト者グループが形成されていた。ローマ教会がどのような経緯で創設されたのかはまったく詳細が知られていないが、おそらく、エルサレムで形成された初期の「使徒たちの教会共同体」に加わったディアスポラ系ユダヤ人たちの一定数がローマに生活拠点を持っており、ローマに戻った彼らを中心に「使徒たちの教えに繋がる教会共同体」が形成されたのだろう。同様のことがシリア・アンティオキアでも起こり、パウロやバルナバらの宣教活動として展開していたが、ローマではまったく別の人脈で「教会共同体」形成がされたと考えられる。もちろん、その場合にも、アンティオキア教会の場合と同様に、使徒たちとの繋がりには必須であり、使徒ペトロの指導性は無条件に受け入れられたものと考えられるが、最初からペトロが教会創設に携わったというわけではない(これも、アンティオキア教会の事例が参考になる。使徒言行録11~13章など)。

・日課箇所は、パウロがアブラハムの故事を引いて「信仰によって義とされる」ことを教えた(4章)のに続いて、このことを「神との和解」という神学的観点で捕らえられる事柄であると説いている。また、この「神との和解」を希望としている者にとっては、「苦難」もまた

「希望」に至る通り道に過ぎないことが語られているが、これは、「キリストの受難と死」に対する解釈として示されることである。

・3~5節はよく知られた聖句であるが、4節「練達(ドキメー)」は、聖書協会共同訳では「品格」と訳されている。「ドキメー」は「試験・吟味・経過・証明」を意味する語で、パウロは、この箇所のほかには「第二コリント」(2:9、8:2、9:13、13:3)および「フィリピ」(2:22)で用いている。「品格」は、「試験を通過したことによって認められた結果」の意で採用された訳語だろうが、意識。

福音書日課(マルコ 10 章より)

・日課箇所は、主イエスが三度目の受難予告をされたことを伝え、それに応じるようにして弟子の二人、ヤコブとヨハネが自分たちの行く末についての願いを申し出たという箇所。共観福音書のうち「マタイ」と「マルコ」が並行して伝えているが、詳細の設定や福音書全体の中での位置づけに相違が見られる。

・「マタイ」との比較で「マルコ福音書」に特徴的なのが、この場面での主イエスの応答を、「洗礼」と強く結び付けていることである(38節、39節)。「杯」は、「受難物語」中の「主の晩餐」の「杯」や、「ゲッセマネの祈り」における主イエスの「この杯をわたしから取りのけてください」(14:36)など、受難解釈と強く結びついている。「マルコ」は、これを「洗礼」とも結び付けることによって、洗礼によって主イエスに従う歩みを始める弟子たちもまた、主イエスの受難を引き受ける者であることを明示しようとしているのだろう。

・ヤコブとヨハネの「願い」に対して、主イエスが「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっていない」と応じられた理由については、さまざまな解釈が示されてきた。通説(俗説)では、彼らが考えていた主イエスの受けられる「栄光」が世俗的な成功を意味していたため、主イエスはその誤解を指摘されたのだ、と解釈される。しかし、文脈上、彼らは、すでに三度の「受難予告」を聴かされた者たちであり、主イエスの「栄光」とは、「死んだ人の子が三日後に復活する」ということに他ならなかったのであるから、そこでなお世俗的な成功を誤認していたとするのは無理がある(そのように決めつけるのは、近代人の古代人に対する潜在的蔑視に他ならない)。おそらく、主イエスが「分かっていない」と指摘されたのは、「主イエスの右と左に伴うことが、主イエスと同様に苦難を引き受けること＝十字架の左右につけられること」についてである。

来週の誕生日 (4月3日~9日)

主日礼拝の讃美歌から

・21-303 番「丘の上の主の十字架」(= II 182 番)は、米国メソジスト派の伝道者 J. ベナードの作詞作曲、初演は 1913 年で、以降、ラジオ放送や大規模な伝道集会で歌われて大衆的讃美歌として普及。原題は「古い荒削りの十字架」。

・21-487 番「イエス、イエス」は、20 世紀スコットランド教会で按手を受けアフリカ宣教に従事した宣教師 T.S. コルヴァンが現地信徒ら自身に伝統音楽に基づいて創作させた讃美歌集『Fill Us With Your Love』に収録された讃美歌の一つ。「主の洗足」の記事に基づいて主の愛に従う道を歌う。

・21-504 番「主よ、み手もて」(= I 285 番)は、19 世紀スコットランドの牧師ボナーの作詞に、19 世紀の作曲家ウェーバーの「魔弾の射手」序曲の旋律を讃美歌用に編曲した曲が組み合わされている。現代の英語讃美歌集ではほとんど採用されていない。

21-303「丘の上の主の十字架」

On a Hill far away

1. On a hill far away stood an old rugged cross, / the emblem of suffering and shame; / and I love that old cross where the dearest and best / for a world of lost sinners was slain.

Refrain:

So I'll cherish the old rugged cross, / till my trophies at last I lay down; / I will cling to the old rugged cross, / and exchange it some day for a crown.

2. O that old rugged cross, so despised by the world, / has a wondrous attraction for me; / for the dear Lamb of God left his glory above / to bear it to dark Calvary.

3. In that old rugged cross, stained with blood so divine, / a wondrous beauty I see, / for 'twas on that old cross Jesus suffered and died, / to pardon and sanctify me.

4. To the old rugged cross I will ever be true; / its shame and reproach gladly bear; / then he'll call me some day to my home far away, / where his glory forever I'll share.

21-487「イエス、イエス」

Jesus, Jesus, Fill Us with Your Love

Refrain:

Jesu, Jesu, fill us with your love, / show us how to serve / the neighbors we have from you.

1. Kneels at the feet of his friends, / Silently washes their feet, / Master who pours out himself for them.

2. Neighbors are wealthy and poor, / Varied in color and race, / Neighbors are nearby and far away.

3. These are the ones we should serve, / These are the ones we should love: / All these are neighbors to us and you.

4. Kneel at the feet of our friends, / Silently washing their feet: / This is the way we should live with you.

21-504「主よ、み手もて」

Thy way, not mine, O Lord

1. Thy way, not mine, O Lord, / However dark it be: / Lead me by thine own hand: / Choose out the path for me. / Smooth let it be or rough, / It will be still the best; / Winding or straight, it leads / Right onward to thy rest.

2. I dare not choose my lot; / I would not, if I might; / Choose thou for me, my God: / So shall I walk aright.

/ Take thou my cup, and it / With joy or sorrow fill, / As best to thee may seem; / Choose thou my good and ill.

3. Choose thou for me my friends, / My sickness or my health; / Choose thou my cares for me / My poverty or wealth. / Not mine, not mine the choice, / In things or great or small / Be thou my Guide, my Strength, / My Wisdom, and my All. / Amen.